[PRESS RELEASE]

2009 年 1 月 5 日
東京大学医学部附属病院
放射線科
緩和ケア診療部

日本人の「死生観」と「望ましい死」についての調査結果

～アンケート調査からわかった現代日本人の死生観～

このたび、東京大学医学部附属病院(以下、東大病院)放射線科及び緩和ケア診療部は、グローバル COE「死生学の展開と組織化」の一環として行っている、日本人の「死生観」と「望ましい死」についてのアンケート調査の結果と中間解析が出ましたので、ご報告いたします。東大病院放射線科外来受診のがん患者３１２名と、一般人口３５３名、東大病院の医師１０６名、看護師３６６名から得られた回答を比較して分かった、現代日本人の「死生観」、「望ましい死」についての結果・解析について公表いたします。

【発 表 者】
東京大学医学部附属病院 放射線科准教授/緩和ケア診療部長　中川恵一
東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻　緩和ケア看護学講師　宮下光令

【背 景】

医療者は、常に患者さんの死と向き合うことが求められており、その接し方に苦慮することも少なくありません。また患者さん本人にとっては、どのようにして死を迎えるかは、さらに重要かつ喫緊の問題となってきます。

しかし、死と向き合うのは、何も医療者・患者に限ったことではありません。死は、いつ誰に訪れるか、誰にも分かりません。しかし、現代日本人には「死をあえて考えない」ムード、もっと言えば「死なない感覚」があるようにも思えます。かつての諸行無常観など、霧散したかのようです。

そこで、現代日本人が死についてどのように考えているのかを調べるために、四半世紀以上にわたって日本人の死亡率の 1 位を占める「がん」に罹っている患者さんを対象とした「死生観」、「望ましい死」に関するアンケートを行いました。また、人称による「死」に対する考え方に違いがあるのかについて調べるために、複数の集団に同様のアンケートを行いました。

具体的には、一人称(がん患者)の死と三人称(医療者、一般人口)の比較を通して、現代日本人の「死生観」「望ましい死」についてアンケート調査をしました。

東大病院放射線科外来受診のがん患者３１２名（依頼数４５０名）、がん治療に携わる東大病院の医師１０６名（依頼数１５５名）、看護師３６６名（依頼数４７０名）、ランダムサンプリングされた東京都一般市民３５３名（依頼数１０００名）の回答を得ました。

これらの結果からわかった、日本人の「死生観」「望ましい死」についてご報告いたします。

【今後の展望】

今後は、がん患者集団内でも、がんの種類・年齢・進行度などの背景によって死生観に違いがあるのか、更なる解析を進めていきます。

また、医療者と患者・患者遺族との死生観の比較から、医療現場で生じている齟齬を埋める一助となる可能性を探っていきたいと考えています。

更には死生学について、画一的な思想の強要ではなく生きる意味を考える契機として提示することにより、社会に還元することも目標としています。

【日　　時】　2009年1月14日（水）　10：30～11：30

【お申し込み】　事前申し込みは不要です。

【会　　場】　東京大学医学部附属病院　入院棟１Ｆカンファレンスルーム

《本件に関するお問合せ先》

東京大学医学部附属病院　（准教授/部長　中川 恵一）

電話: 03-5800-8786（直通）

《プレスリリース配信元》

東京大学医学部附属病院　パブリック・リレーションセンター

電話：03-5800-9188（直通）　E-mail：pr@adm.h.u-tokyo.ac.jp